九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

波多野流平曲の古譜本について

奥村，三雄

https://doi.org/10.15017/2332676

出版情報：文學研究. 79, pp.15-43, 1982-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

波多野流平曲の古譜本について

奥村三雄

本稿はいわゆる波多野流平曲譜本の多様性という事に関連して、その古譜本を考えようとするものであり、『平曲譜本の研究』（昭和56年桜楓社刊）30頁〜等の記述に連る。

〔1〕 従来においては、「前田流の譜本が多種多様であるのに対し、波多野流譜本は概ね同文同譜」というような説（『文学』昭和28年2号や勉誠社刊『波多野流節付語り本（6）』821頁など渥美かをる氏記述）が有力だが、実際問題としては必ずしもそうは言えない。

〔1.1〕 さし当り京都大学国文研究室本（京と略称する）・東京大学蔵松岡仲良写本（松と略称する）の二書などは、波多野流譜本中でも相互によく似たものと言えるが、それでも次の如き譜記差が数多認められる。

帰られ（㊂㊃）＝「一（京7下255初重）－て┐（松）、うち送り（㊁）＝＼下（京255初重）－〜下（松）、程（ホド）（㊁）＝ア（京257拾）－ア（松）、惜しみ（㊁）＝ア一（京255初）－ア（松）、名残（ナゴリ）（㊂）＝＼・（京254初重）－＼（松）、参り（㊂）＝一（京247指声）－一下（松）、行幸（ギヤウカウ）（㊂）＝・／（京257拾）－（松）、行きなん（㊂）＝〜（京256歌）－〜・（松）、申され（㊀㊁㊂）＝＼＼＼（京251下ケ）－×××（松）、童形（トウギヤウ）（㊂㊃）＝一一（京253中音）－××（松）、なさん（㊁㊂）＝一一（京251折声）－××（松）

（注）右記において最初の例は次の如き意味を表わす。――京大本7下255頁初重における「帰られ」の第三・四拍（られ）には、〔ㄱ一〕の如きハカセが認められるが、松岡本ではその部分が〔てㄱ〕の如く譜記される。その他も概ねこれに準ずる。

※　京大本の頁数は勉誠社の影印本による。

※　松岡本については、本稿〔6.2〕項にその巻7下第二冊「経正都落」の冒頭部分を影印紹介した。京大本については勉誠社刊の影印本を参照されたい。

右記は、特によく似た譜記の両書を比較したものであり、その他の譜本に関しては、当然これ以上の差が種々認められる。

〔1.2〕　尤も、それらも見方によっては概ねユレの程度であり、「同文同譜」説に対する積極的な反証ではないかもしれない。しかしここで特に注目すべきは、山口県立図書館蔵の『秦音曲鈔』や『小秘事』、同文書館蔵の『平家語本』など、異色ある波多野流古譜本がいろいろ認められる事だろう。更には藤井雪堂の『平語偶談』（国会図書館蔵）や『追増平語偶談』（静嘉堂文庫蔵、前者の増補本）の「曲節名目」、『平語偶誌』（高橋貞一氏蔵、『偶談』の転写本）の「波多野流古来節名目」、「当道用集続筆の節名目」（京大蔵波多野流本巻一上に引用）等によれば、右記山口図書館本の類以外にも異色ある古譜本の存在が想定されるのである。

その辺の事情については拙著『平曲譜本の研究』でも或程度述べた所があるが、ここではとりあえず右記『秦音曲鈔』（及び『平家語本』）を中心に、もう少し考察を加えようとする。なお本稿〔6.2〕稿では、『秦音曲鈔』巻7下及び『平家語本』巻14の「経正都落」冒頭部を影印紹介した故、参照されたい。

〔2〕　『秦音曲鈔』は十二巻の上下で計二十四冊の完本。多賀神社旧蔵本として山口県立図書館に蔵される。外題「秦音曲鈔」、内題「平家物語」。六行本で一行平均約十八字。全巻にきめ細かく節ハカセが付されている。巻十二下の末に次の如き跋文が存する。「……平家…余之ヲ好ムコト久シ…則琵琶ヲ鼓シテ歌フ…其書十二巻…披

見ニ不便、繁沢一外翁余ト嗜ヲ同ウス、頃嘗テ余ヵ為ニ親ク自ラ筆ヲ舐テ譜本一部ヲ写ス、因テ分テ二十四巻ト為ス、甚軽便、且翁齢懸車ヲ超ェ筆力猶ニ尓稚ー、健想テ其人ヲ見ツ可シ……享保十四年歳次己酉孟昏日粟屋右近源元忠謹書」

そして各巻の末にもやはり「源元忠」と記される。

（注）この譜本に関し『平曲譜本の研究』31頁で、「奥書識語の類がない」とあるのは、同じ図書館所蔵の『小秘事』について記すべき（同右書40頁）事がまぎれこんだもの。奥書識語がないという記述そのものは誤りではないが、奥書識語の類がないとは言えないわけである。

所で享保十四年（1729）と言えば、書写年代の明らかな波多野流譜本としては最古のものと言うべく、明和六年の松岡本や寛政十一年の岸部検校本『小秘事』よりもそれぞれ四十年・七十年古い事になる。跋文の筆者源元忠、及びこの譜本の筆者と思われる繁沢一外翁については未詳だが、何れにしてもその内容は享保十四年成立の譜本でなく、それ以前からあった譜本の転写本という事になる。

而してこの書が波多野流本である事は、「秦音」の表題や、「祇王」の句が「我身栄花」の次におかれる事実などからも一おう察せられる所である。

〔2.1〕 かくしてこの書がいわゆる波多野流の古譜本である事は、外的徴証の面からも或程度推察できるわけだが、この事はまた内部徴証の面からも承認できる。さし当り『秦音曲鈔』（ここでは秦と略称する）の詞章や節ハカセを、波多野・前田両流諸譜本及び一方流諸本と比べてみると、下記〔6.1〕項(A)(B)の如くである。

以下これについて若干の考察を試みよう。

〔3〕 ここで先ず注目すべきは、前記『平家語本』（ここでは語と略称する）との関係だろう。もともと秦はかなり特異な譜本と言えるが、語との関係だけは酷似とも言うべき状態を示す。秦の詞章や譜記が語とのみ一致し、他の諸

本と対立する例については、下記〔6.1〕項（Ⓐの㋑やⒷの㋑～㋕等）にその一部を示したが、この種の例は他にもなお多い。

さし当り**秦語**両書に認められる〔分〕の如きも、その例と言えよう。尤もこれは「中将（秦7下97口）・中納言（同99拾）・侍従（同98拾）・仲快（同99拾）」など、他譜本の割ル注記に対応すべき場合が多く、発音注記的な意味が多いかと思われるが、ともあれ他の譜本類ではちょっと見当らない所である。

また曲節については詳述しないが、大体の方向としてはやはり詞章や譜記の場合に準ずる。例えば**秦語**両書の口説が、波多野・前田両流諸本の中音（秦8上443行めの部分）・初重（秦7下862行め）・下ケ（同741行め）・指声（同853行め）等に対応するというような現象を、数多認め得るのである。

〔3.1〕 **秦語**両書の間には、直接的な親子関係とは言わないまでもかなり親しい関係が想定されよう。もともと**語**は**秦**と同じく「防陽多賀神社文庫」旧蔵本として山口県立文書館（図書館から分れたもの）に蔵されており、或意味での関係深さを思わせる。そう言えば山口図書館には同じ多賀神社文庫旧蔵の『小秘事』があるが、その譜記形象もやはり**秦**や**語**に準ずるものなのである。『平曲譜本の研究』94頁～等も参照の事。

内部徴証的に見て、**秦語**両本がほぼ同文同譜と言うべき状態にある事は、下記〔6.1〕項諸例を一見して明らかだろう。特に本文詞章等の面では殆んど差が見られないのである。

〔3.2〕 ただしこの場合、その両書間に直接的な親子関係を認める事は難しそうである。例えば下記〔6.1〕項Ⓑの㋩㋪諸例の如き譜記差等も、一おう揺れの程度に留まるとは言えるが、しかし直接的な転写関係を想定するのは、ちょっとはばかられるものがある。

〔3.21〕 特に**秦**の場合はその跋文からして或譜本の忠実な転写本と見られるが、その底本が**語**の如き姿でなかった事は言をまつまい。即ち**語**は、その巻十二に「紅葉・葵前・小督」の三句を収め、巻十三に「竹生島詣・倶梨迦羅落・

主上都落・維盛都落」の四句を収めるという調子の抜萃本なのである。

〔3.22〕而してまた逆に、語を秦からの直接的抜萃本と見る事も難しい。下記〔6.1〕項(B)の(ハ)(オ)の如き譜記差の面の他、例えばその組織面を見ても、語の基づいた譜本は秦と異なり、十二巻（流布本等の）のそれぞれを上下に分かたない形のものだったかと思われる。即ち語の巻13・巻20・巻21には、それぞれ秦の巻七上下・巻十上下・巻十一上下の所属句が収められるのである。

更に秦は語に比べて、誤脱表記かと思われる現象がまま認められる事なども気になる。さし当り下記〔6.1〕項(B)の(オ)等は譜記面におけるその例と言えるが、また詞章面でも、やはり次の如きが或程度見られる。

かけさじ（秦7下107）→させ（語）（諸本）、忘れたる×有り（同89・左横に「事」と加筆）→事（語）（諸本）、雲×（秦8上46・上欄外に「客」と加筆）→客（語）（諸本）

（注）右記において、最初の例は次の如き意味を表わす。――秦7下107頁「かけさじ」の部分は語はじめ諸本で「かけさせじ」とある。

※即ち→印は波線部分のみの異同を示すわけである。

〔3.3〕なお問題は残されそうだが、要するにここでは、秦を≪語とごく親しい関係にある譜本からの抜萃本≫と考えたい。

〔3.31〕所で抜萃本と言えば語の譜記は下記〔6.1〕項(B)の(ハ)諸例の如く秦のそれを簡略化したような形象が多いが、或種の稽古本の類と見るべきか。

それに関連して、「スム・ツメ・ハナ」の如き発音注記も語より秦に多いようだが、これもやはり簡略化の例と言えよう。左記は何れも秦の発音注記のうち、語にそれが欠けているものの例である。

スム―童形（秦7下71）・上玄（同86）・前途（同102）・比叡山（同103）・神器（同115）・台（同119）、ツメ―九月十三夜（秦8上49）、ハナニ―蟋蟀の（秦7下120）

（注）右記の例では、それぞれ、傍線部に各発音注記が認められる。

〔3.4〕 ともあれ**秦**と**語**とがごく近い関係の譜本である事は動かない。また同じ図書館に蔵される『小秘事』もこれに準ずる譜本と見られるわけだが、この事はさし当り次の如き意味で注目される。即ち、波多野流譜本は従来からも説かれる如く概ね同文同譜のものが多い。従って、**秦**の如き特異な波多野流本があっても孤立的存在であるならば、それは≪ごく影の薄い一時的なもので、実用面での使用も稀だった≫という考え方ができそうだが、実際問題としてその考え方は通らない。**秦**の跋文によれば、これら三書の他にも同種の先行譜本があったらしいし、特に**語**の場合は或種の稽古本だった可能性も存する事など、前述の如くである。

〔**4**〕 前記の如く**秦語**の両譜本はいろんな面で特異性が著しいが、いわゆる波多野・前田両流諸譜本と比べて見た場合、波多野流本との共通性が著しい事、勿論である。

〔4.1〕 これら両書と波多野流本との共通性は、下記〔6.1〕項(A)の(ハ)や(B)の(リ)～(ム)等）諸例を一見しても或程度明らかなはずだが、さし当り譜記の面で〔ノ・ン・ン〕の類や〔ハヒ・ノ・ニ〕など、何れも波多野流本と一致または酷似している。また〔ツ・ツ・ツ〕の類や〔ア〕〔イ〕なども、それぞれ波多野流本の〔ン・ン・ン〕や〔ン〕〔引〕に似ていると言えよう。

更に〔／・＼〕の如き線条式ハカセは、必ずしも波多野流本的特徴とは言えないが、その用法に関しては、やはり下記〔6.1〕項(B)の(163)～(165)など、両書と波多野流本との共通性がめだつのである。

その他、白声曲節が確立しており、それが譜記を欠く点で口説と区別される事なども、波多野流本のみの特徴とは言えないが、波多野流本に著しい傾向とは言えよう。『平曲譜本の研究』147頁～や170頁～等参照の事。

それに関連して、〔引・ス〕の如き節ハカセに関する下記〔6.1〕項(B)の(ヤ)(ラ)諸例なども、概ね右記に準ずる。即ちそれらも巨視的には、一おう**秦語**両書及び波多野流諸本に著しい傾向と言うべく、例外は前田流の也有本『平語』や

平曲吟譜にそれぞれ若干認められる程度なのである。

〔4.11〕なお『平曲譜本の研究』94頁〜でも述べた如く、山口県立図書館蔵の『小秘事』（**秘**と略称）の譜記も、全体として**秦**のそれに酷似しているが、子細に見て行くと次の如く、**秦**と異なり**京松**などの波多野流本に似た面もある。而してこの事もやはり**秦語**（及び**秘**）の波多野流本的性格を示すと言えよう。

例えば**秘**の譜記には、「奉り＝≡一一一 ≡（秘5中音）」など、〔≡（一淘居）・≡（二淘居）・≡（三淘居）〕の類があって、**京松**等と一致し、**秦語**と異なる。これらに対応する**秦語**の譜記は下記〔6.1〕項(B)の(ル)(ヲ)諸例の如くそれぞれ概ね〔ツ・ツ・ツ〕の様な形象をとる。

結局ここではその**秘**を**秦語**の如き波多野流古譜本から**京松**の如き新しい波多野流本への過渡期的存在と見なすわけだが、この場合**秦語**が古い波多野流本と見られる事に関しては、後で詳述する。

〔4.12〕ともあれ前記の如き波多野流本的特性の数々に対し、**秦語**両書の譜記が波多野流本より前田流本に似ているというような例は、殆んど認められない点、注目すべきだろう。

〔4.2〕本文詞章の場合もほぼ右記に準ずる。下記〔6.1〕項(A)の(50)〜(54)の如き例外はごく僅かなのである。

〔4.21〕尤もそのような例外的存在は、僅かではあっても無視するわけにはゆかないものがあるが、つまりは波多野流譜本における詞章変遷の事実を物語るのだろう。

さし当り下記〔6.1〕項(A)の例(54)の場合は次の如き考え方ができそうである。——波多野・前田両流ともに最初は等しく分岐以前の本文詞章（つまり葉子本・時房本・流布本等の詞章）をうけついだが、波多野流本は途中で詞章改訂が行われた。

これに対し、(50)〜(53)の例はやや事情が異なるが、或いは、初期の波多野・前田両流譜本が踏襲した本文として、葉子本・時房本・流布本以外の或本を想定すべきか。尤もこの場合、これら(50)〜(53)の例はいずれも「宇佐行

幸」間物の詞章であり、平家正節・也有本以外の前田流諸本にその部分が欠けているという事情を考え合わすべきかもしれない。古い前田流本にこの部分の詞章があれば、**秦語**両本と異っていたかもしれないのである。

〔4.3〕所で**秦語**両書を波多野流譜本と見た場合、さし当って問題となるのは『国語国文学研究史大成（9）』247頁等で、山口県立図書館蔵の『平家語書』及び『小秘事』が前田流譜本に含められている事だろう。この『小秘事』は「山口県立図書館蔵、多賀神社文庫旧蔵」と記される故、本稿で波多野流古譜本と見なした**秘**を指すはずである。一方、『平家語書』という譜本は山口図書館にないし、以前にも所蔵されていた形跡がない故、やはり本稿で波多野流古譜本と見なした**語**つまり『平家語本』を指すと考えたい。恐らく「本（本）」が「書（書）」に見誤られたのだろう。右記『国語国文学研究史大成（9）』でも、『平家語書』は『小秘事』と同譜形と記されるが、その点でも現存『平家語本』と揆を一にする。『平家語本』は山口県立文書館所蔵だが、これは同図書館から分れたものである故、その点は問題がない。

〔4.31〕なおこれらが従来、前田流譜本とされた事の背後には、やはり≪波多野流譜本は概ね同文同譜であり、このような特異な譜本はないはず≫という考え方が働いたと想像されるのである。『平曲譜本の研究』40頁〜等も参照の事。

〔**5**〕前記の如き観点からすれば、**秦語**両書が波多野流譜本類と異なる例は概ねそれらの特異性という事になりそうだが、ここで注目すべきは、それらの中にいろんな意味で古色を保つらしい例が多い事だろう。

〔5.1〕下記〔6.1〕項(A)の(ロ)の如きはその代表的な例と言える。即ちそれらは何れも、**秦語**両書の本文詞章が波多野・前田両流譜本類と異なり、覚一本・葉子本などの一方流古本と一致するのである。さし当りその例（16）の場合は、次の如き考え方ができる。――覚一本・葉子本などで「(申され) けれ」とあったのを、時房本・流布本が「たりけれ」と改め、それが前田流にうけつがれた。それに対し**秦語**、つまり初期波多野流本は覚一本等の形に復したが、新しい波多野流本は流布本などの形に従った。

〔5.11〕節ハカセの場合はそのような考察は難しいが、しかし次の如く、古色と見るべき例は数多認められる。例えば〔ウ・クリ上〕の如き譜記は、**秦語**以外の譜本類では稀だが、『平語偶誌』（高橋貞一氏蔵）の「波多野流古来節名目」に認められる。特に〔ウ〕の場合は、その譜記形象も右記「古来節名目」と一致するし、またその用法も下記〔6.1〕項(B)の(ヨ)諸例の如く、概ね諸譜本の浮（うき）に対応しており、「古来節名目」と一致する。〔クリ上〕の場合はその名称が右記「古来節名目」や『追増平語偶談』（静嘉堂文庫蔵）の「節名目」と一致する。尤もその譜記形象や用法には必ずしも一致しない面がありそうだが、ともあれ〔クリ上〕という節ハカセは、**秦語**両譜本以外では稀なものとして興味をひく。

また**京松**などいわゆる波多野流諸譜本の節ハカセには、〔コ（断（ことはり））〕〔スク〕など、**秦語**の譜形（それぞれ〔コト〕〔スクヒ〕）に対する略記法の類がしばしば認められるが、その逆の例はない。而してこの種の略記法も一般に新しい姿と見るのが普通だろう。その両者に関し**秦語秘**諸譜本では、更に丁寧な譜形〔コトハリ〕の如きも認められるのである。『平曲譜本の研究』164頁〜等も参照の事。

〔5.12〕一方、**秦**の目録では「鱸付禿童、新大納言死去付徳大寺厳島詣、山門滅亡付善光寺炎上、有王嶋下并僧都死去」等々、二つの句をつないだ形式が数多存していて、**京松**の類をはじめ波多野・前田両流譜本と異なるが、この**秦**の形式は流布本の目録とほぼ一致する。これもやはり、初期波多野流本の**秦**は流布本の形式を踏襲したが、新しい波多野流本ではそれを改めたと見るべきだろう。

〔5.2〕以上、**秦語**両書が波多野流譜本の古い姿を示すと見るべき諸現象をとり上げたが、更に言えば本稿で**秦語**両書のみの特異性と見なしたものの中にも、これに準ずる例が含まれている可能性がある。

〔5.21〕例えば**秦語**の譜記には、次の如く金田一春彦氏蔵『平家書』（**金**と略称）と似た面が認められるが、これもやはり或意味で古い姿である事を思わせる。「**金**を室町中期の譜本と見なす」説（『国語アクセントの史的研究』302頁や『中

央公論』昭和51年11号等金田一春彦氏記述）自体には問題が残るとしても、これが相当古い譜本である事は動かない。『平曲譜本の研究』18頁〜等も参照の事。

左記は何れも**秦語**の譜記が**金**に似ている例である。

(イ)〔ㄥ・ㄧㄥ・ㄧㄧㄥ・ㄥ下〕の類は**金**と一致する場合が多い。

(i)〔ㄥ（秦語金）〕—〔ㄟ（京松）〕—〔ろ（尾）〕の例。近江（アフミ）（㊁秦9上23拾）、乱杭（ラングヒ）（**末**同24初）

(ii)〔ㄥ（秦語金）〕—〔ㄱ（京松尾）〕の例。範頼（ノリヨリ）（㊀同22拾）、義経（ヨシツネ）（㊀同23拾）、人々（㊁同22拾）、その（**末**同24拾）

(iii)〔ㄥ下（秦語金）〕—〔ㄟ（京松）〕—〔ろ（尾）〕の例。折節（ヲリフシ）（**末**同25三）

(ロ) **秦語**の〔ㄧッ・ㄧㄧッ・ㄧㄧㄧッ〕などは、それぞれ**金**の〔ㄧㄟ・ㄧㄧㄟ・ㄧㄧㄧㄟ〕に対応する事が多い。

(i)〔ㄧッ（秦語）〕—〔ㄧㄟ（金）〕—〔スヘ（京松）〕—〔ㄥ（尾）〕の例。国（クニ）（**末**同23拾）、経（ヘ）て（**末**同24拾）

(ii)〔ㄧㄧッ（秦語）〕—〔ㄧㄧㄟ（金）〕—〔ㄧㄧㄥ（京松）〕—ㄋㄥ（尾）〕の例。押し（㊀同24拾）、大綱（オホヅナ）（㊂同24拾）

(ハ)〔／〕や〔＼〕の用法についても、**秦語**と**金**との一致例がしばしば認めれる。

(i) **秦語金**の〔／／＼〕が波多野流・前田流諸譜本の〔／＼×・／××・上××〕の類に対応する例。馬を（同21口）、大手（オホテ）（同22拾）、武田（同22拾）、熊谷（クマガヤ）（㊀㊁㊂同23拾）

(ii) 右に関連して、**秦語**の〔／ヲ＼〕が**金**の〔／＼〕に対応し、諸譜本の〔＼／〕と対立する例。大将軍（㊀㊁同22拾）、御曹司（オン）（㊀㊁同22拾）、相伴（アヒトモナ）ふ（㊀㊁同22拾）

（注）右記において(イ)の(i)の例により次の事がわかるわけである——。「近江（アフミ）」（秦9上23頁拾）の第二拍部分（フ）及び「乱杭（ラングヒ）」（同24頁初重）の語末部分（ヒ）の譜記を調べてみると、それぞれ**秦語金**は〔ㄥ〕、**京松**は〔ㄟ〕、**尾**（尾崎本平家正節の略称）は〔ろ〕の如き対応を示す。

また(ハ)の(ii)の例の場合は、「大将軍」の第一・二拍部分（タイ）の譜記が、〔／ヲ＼（秦語）・／＼（金）・＼／（諸本）〕の如き対

応を示す事になる。

※ 譜記比較に当っては、管見の範囲内ですべての譜本をとり上げたわけだが、ここでは**秦語金**の三本の他、波多野・前田両流譜本の代表として**京松**及び**尾**の諸本を例示した。

※譜記比較の示し方については下記〔6.1〕の説明をも参照の事。

〔**6**〕 以上≪(i)山口県立図書館蔵の『秦音曲鈔』は繁沢一外翁が先行譜本を転写したものであり、詞章・譜記ともに特異性がめだつが、一おう波多野流の古譜本と見なされる事。(ii)同文書館蔵の『平家語本』は、それとごく親しい関係にある譜本からの抜萃本である事。(iii)同図書館蔵の『小秘事』は、右記両譜本から**京松**の如き波多野流本への過渡期的性格を示す事≫等を述べた。そこから波及する問題・発展させるべき問題は誠に多いが、それらはすべて別稿をまつ事とし、以下とりあえず本稿の資料編として≪**秦**の詞章や譜記と、**語**はじめ波多野・前田流諸譜本及び一方流諸本との比較対照例≫を掲げ、最後に参考として≪**秦**(巻7下)及び**語**(巻14)・**松**(巻7下第二冊)の「経正都落」冒頭二頁分≫を影印紹介しよう。

〔6.1〕 詞章・譜記対照例一覧(その表示法等は後で説明する)

(A) 本文詞章対照例

(イ) **秦語**両書の特異性

(1) つかまつる〳〵(秦7下72・語)→り候ひし(京松尾吟也豊ヨトル)、(2) 候ひぬ(同73・語)—候へば(京松尾吟也豊トル)、(3) 筑紫で〳〵(同8上41・語)→にて(京松尾也カヨトル)、(4) かひぞなき(同41・語)—×(京松尾也カヨトル)、(5) 然らば(同41・語)—さらんには(京松尾也カヨトル)、(6) ×〳〵木曽が(同41・語)→高倉宮の御子の宮を御乳母讃岐守重秀が御出家せさせ奉り具し奉つて北国へ落ち下ったりしを(京松尾ヨトル)、(7) 参らっさせ奉ふべき(同41・語)—参らせんずらん(京松尾也トル)、(8) 参らっさせ(同42・語)—奉る(京松尾也

カヨトル）、（9）新中納言知盛卿進み出て（同42・語）―人々（京松尾也ヨトル）、（10）たとひさ候へばとて木曽なんどが主にし奉ったる還俗の宮をばいかでか（同42・語）―いかでか還俗の宮をば（京松尾也ヨトル）、（11）入らせ（同43・語）―にげこもらせ（京松尾也ヨトル）、（12）×主に（同41・語）→上洛の時（京松尾也ヨトル）、（13）し奉ったる還俗の宮をば（同41・語）―し参らせんとて還俗せさせ奉り具足し奉って都へ上ったるをぞ（京松）（尾也ヨトル・それぞれ小差あり）、（14）後悔せられけれども（同41・語）→ば（尾也カ）―申し合はれければ（京松ヨトル）、（15）都には（同44・語）―太上天皇（尾也）―×（京松ヨトル）

(ロ) **秦語**両書が古色を示す例

（16）申されけれ（秦7下76・語カヨ）→たりけれ（京松尾吟也豊トル）、（17）これ（同8上41・語カ）―この由（京松尾也ヨトル）、（18）聞いて（同41・語ヨ）→き給ひ（京松尾也トル）、（19）安からぬ（同41・語）―あはれ（京松尾也トル）、（20）申せし（同43・語ヨトル）→せ（京松尾也）、（21）奉ったる（同44・語カ）→参らせ（京松尾也ヨトル）、（22）還俗の宮×（同44・語カヨ）→なれば（京松尾也トル）、（23）太上法皇（同44・語ヨトル）→天（京松尾也カ）、（24）回廊には（同46・語カ）→は（京松吟也豊ヨトル）

(ハ) **秦語**両書の波多野流本的性格

（25）自から高らかに（秦7下72・語京松）―×（尾吟也豊カヨトル）、（26）申され（同72・語京松）→し入れら（尾吟也豊カヨトル）、（27）この後もし（同76・語京松）―もし（尾吟也豊カヨトル）、（28）もし（同76・語京松）―もしふしぎに（尾吟也豊カヨトル）、（29）立帰る（同76・語京松）―都へ立帰る（カヨトル）→帰り上らせ給ふ（尾吟也豊）、（30）ⓐ袂にすがりⓑ名残を惜しみ（同77・語京松）→baの順（尾吟也豊トル）、（31）惜しみ×（同78・語京松）→参らせて（尾吟也豊トル）、（32）この人（同78・語京松）→×（尾吟也豊カヨトル）、（33）続けらる（同78・語京松）→給ふ（尾吟也豊カヨトル）、（34）聞き（同8上41・語京松）―伝へ聞き（尾也カヨトル）、（35）木曽（同

41・語京松）―義仲（尾也ヨトル）、(36) 付かせ給ひ（同43・語京松）―申し（尾也カヨ）、(37) 立てられける（同44・語京松）→る（尾也カヨトル）、(38) 幼少（同7下71・語京松カヨトル）―いまだ幼少（尾吟也豊）、(39) 覚えぬ（同73・語京松カヨトル）―存じ候はぬ（尾吟也豊）、(40) 必ず立帰る（同73・語京松トル）→×（尾吟也豊カヨ）、(41) とぞ申されける（同74・語京松カヨ）―と申されたりければ（尾吟也豊）、(42) 入たる（同75・語京松カヨ）―入たりける（尾吟也豊トル）、(43) 筑紫（同8上41・語京松ヨトル）―西国（尾也カ）、(44) 下るべき（同41・語京松ヨトル）→かりし（尾也カ）、(45) ×大伴皇子（同43・語京松カヨトル）→大和国宇多郡をすぎさせ給ふにはその勢僅かに十七騎されども伊賀伊勢にうちこえ美濃尾張の軍兵を以て（尾也）、(46) まして（同44・語京カヨ）―況んや（尾也トル）、(47) 給ひき（同43・語京松カヨトル）→にき（尾也）、(48) 皆（同45・語京松カヨトル）―×（尾也）、(49) ありけり（同46・語京松尾カヨトル）→るとかや（貞吟豊）

(二) **秦語**両書が前田流本に似ている例―例外的存在

(50) 取り（秦8上41・語尾也カ）―具し（京松ヨトル）、(51) 我朝には×（同42・語尾也）→先づ（京松カヨトル）、(52) 給ひしか（同43・語尾也）→たりしか（京松ル）・たりしかども（カ）・たりけるが（ヨ）・て（ト）、(53) さる程に（同44・語尾也）―×（京松カヨトル）、(54) ×平家は（同45・語尾貞吟豊ヨトル）→さる程に（京松カ）

(B) 譜記対照例

(イ) 〰――概ね諸譜本の大廻（おほまはし）〔**波**〕・**尾**ろ〕の類に対応する事が多いが、諸本の〔ㄱ〕に対応する例もかなりある。

(i) 〔〰（秦語）〕―〔〰（京松也）〕―〔〰（吟）〕―〔ろ（尾豊）〕の例。(1) 至る（㊁77中）、(2) 続けらる（㊂78初）、(3) 奉らる（㊄80拾）、(4) 御子（オン）（**末**78中）、(5) 飽かず（77歌）、(6) 数輩（スハイ）の（**末**77中）、(7) 名残（ナゴリ）ばかり（**末**72折）

(ii) 右記(i)に準ずるが、**豊**は〔ゑ・ゑ・ゑ〕の類。(8) 流し（㊀78中）、(9) 候ふ（㊀78中）、(10) 中にも（㊂78中）、(11) 出でられける（㊄77中）。(12) 申されける（㊄75下ケ）、(13) なかり（末78中）、(14) 光頼（クワウライ）の（末78中）。(15) 飽かぬ（末77歌）、(16) 参られけり（末75拾）

(iii) 右記(ii)に準ずるが**尾**も〔ゑ・ゑ〕など。(17) 御坪（オツボ）に（末75拾）、(18) 帰られけるが（末78初）

(iv) 右記(iii)に準ずるが、**豊**は〔引・引〕など。(19) 高紐（タカヒモ）（㊁74拾）、(20) 返事に（末79下ケ）、(21) 下（クダ）されて（末77下ケ）

(v) 〔〕（秦語）〕—〔ㄱ（京松吟也尾豊）〕の例。(22) 挾み（㊀74拾）、(23) 集まり（㊀79拾）、(24) 上げさせ（㊀75拾）、(25) 萌黄匂（モエギニホヒ）（㊃74拾）、(26) 長覆輪（ナガブクリン）（㊃74拾）、(27) 持たせられ（㊃79拾）、(28) 我は（末79歌）

(ロ) 〔ゥ・〕—それぞれ概ね右記〔〕に準ずる。

(i) 〔ゥ（秦語）〕—〔ㄱ（京松也）〕—〔ㄱ（吟）〕—〔ろ（尾）〕—〔ゑ（豊）〕の例。(29) 仰せけれ（㊁74下ケ）

(ii) 〔下（秦語）〕—〔ㄱ（京松也）〕—〔ㄱ（吟）〕—〔ゑ（尾豊）〕の例。(30) 大納言（㊂78中）、(31) ぬらさぬは（末78中）

(ハ) 〔ㄨ〕—下記〔ア〕に準ずる場合が多い。

(i) 〔ㄨ（秦語）〕—〔ㄱ（京松豊）〕—〔て（吟也）〕—〔ㄟ（尾）〕の例。(32) 後の（末77歌）、(33) 筧（カケヒ）の（末77歌）

(ii) 右記(i)に準ずるが**尾**は〔∨〕。(34) 後（オク）れ（末79歌）

(ニ) 〔ア〕—概ね**波**の〔／〕、**尾**の〔上（振上（ふりあげ））〕に対応する事が多い。

(i) 〔ア（秦語）〕—〔／（京松吟）〕—〔〜（也）〕—〔上（尾）〕—〔上ル（豊）〕の例。(35) 脇に（末74拾）、(36) 経正（ツネマサ）（末74拾）

(ii) 右記(i)に準ずるが**豊**は〔〉上〕。(37) 馳(ハ)せ (**末**79拾)

(ホ) 〉ア—次の如く概ね右記〔ア〕に準ずるが、**京松**は〔〜〕。〔〉ア(秦語)〕—〔〜(京松吟也)〕—〔〉上(尾)〕—〔上ル(豊)〕の例。(38) 持たせ (㊀79拾)、(39) 萌黄匂 (㊀74拾)

(ヘ) 〱—**波**の〔引〕、**尾**の〔〰(持(もつ))〕などに対応する事が多い。

(i) 〔〱(秦語)〕—〔〱引(京松)〕—〔〜(吟也)〕—〔〰(尾)〕—〔引(豊)〕の例。(40) 老木(オイキ) (㊀79歌)、(41) 別(ワカ)るる (㊀77歌)

(ii) 右記(i)に準ずるが**豊**は〔モ〕。(42) うち送り (㊀78初)

(ト) 〲—概ね右記〔〱〕に準ずるが、**波**の〔・〕(乙(オツ))に対応する例もある。

(i) 〔〲(秦語)〕—〔引(京松)〕—〔〰(尾吟也)〕—〔引(豊)〕の例。(43) 遠く (㊀79歌)、(44) 宮(ミヤ) (㊀77歌)

(ii) 〔〲(秦語)〕—〔・(京松)〕—〔〰(吟也)〕—〔ア〰ウ(尾)〕の例。(45) 思ひ (㊁78初)

(チ) 〱上—原則として張(はり)の類に対応する事が多い。

(i) 〔〱上(秦語)〕—〔・/(京松)〕—〔〱(尾)〕—〔ハル(豊)〕—〔/(吟也)〕の例。(46) 雲居(クモヰ) (㊁122中)

(ii) 右記(i)に準ずるが、**京松**は〔ハル〕、**豊**は〔×〕。(47) 前途 (㊁102中)

(リ) ア—原則として**波**の〔・〕または〔ㄱ〕に対応し、**前**の〔〉・〈・て・ㄱ〕の類に対応する。

(i) 〔ア(秦語)〕—〔・ㄱ(京松)〕—〔て(吟也)〕—〔〉(尾豊)〕の例。(48) 今日(ケフ) (㊀秦7下72折)、(49) 数輩(スハイ) (㊁77中)、(50) 哀れ (㊁79歌)、(51) 斯(カ)うぞ (㊁78初)

(ii) 右記(i)に準ずるが、**京松**は〔ㄱ〕。(52) 時(トキ) (㊀78中)、(53) 惜しみ (㊀78中)、(54) 童形(トウギヤウ) (㊀77中)、(55) 仰

せ（㊀74下ケ）、(56) 下（クダ）され（㊁77下ケ）、(57) 大床（オホユカ）へこそ（㊄75拾）、(58) 名残（ナゴリ）ばかり（㊄72折）、(59) 果て（末72折）、(60) 老木（オイキ）（末79歌）、(61) 遠く（末79歌）、(62) 申され（末75下ケ）、(63) 別るる（末77歌）

(iii) 〔ア（秦語）〕―〔ㄱ（京松吟）〕―〔て（也）〕―〔∧（尾豊）〕の例。(64) 惜しみ（㊁78中）、(65) 童形（㊁77中）、(66) 流し（㊁78中）、(67) 飽かずして（㊃77歌）、(68) 時（トキ）（末78中）、(69) 中（ナカ）にも（末78中）、(70) 御子（オン）なり（末78中）、(71) 参られけれ（末75拾）、(72) 奉らる（末80拾）

(iv) 〔ア（秦語）〕―〔ㄱ（京松吟也尾豊）〕の例。(73) 形見（カタミ）（㊁77歌）、(74) 早め（㊁80拾）、(75) 先（サキ）だち（㊁79歌）、(76) 高紐（タカヒモ）（㊂74拾）、(77) 君（末77歌）、(78) 水（末77歌）、(79) 中（ウチ）（末77歌）

(ヌ) ア下―概ね右記の〔ア〕に準ずる。

(i) 〔ア下（秦語）〕―〔ㄱ（京松）〕―〔ㄱ（吟尾）〕―〔て（也）〕―〔∨（豊）〕の例。(80) 御子（オンコ）（㊀78中）

(ii) 〔ア下（秦語）〕―〔ㄱ（京松）〕―〔ㄱ（吟也尾豊）〕の例。(81) 参られ（㊀75拾）

(iii) 右記(ii)に準ずるが、**京松**は〔ㄱ下〕。(82) 替れども（㊂77歌）

(iv) 右記(ii)に準ずるが、**京松**も〔ㄱ〕。(83) 坊官（バウ）（㊀77中）、(84) おはせし（㊀78中）、(85) 奉らる（㊀80拾）、(86) 端（ハタ）まで（㊂78初）

(v) 右記(iv)に準ずるが、**尾**は〔ㄱ〻〕。(87) 残らじ（㊁79歌）、(88) 包みてぞ（末77歌）

(vi) 右記(iv)に準ずるが、**尾**は〔ア〕。(89) 候らはず（㊀73指）

(ル) ㇾツ―概ね淘居（ゆりすゑ）（波）ㇾ・尾〔ㄛ〕に対応する。

(i) 〔ㇾツ（秦語）〕―〔ㇾㄛ（京松）〕―〔ㄱ（吟）〕―〔ㄛ（尾）〕―〔ㄛ（豊）〕―〔スヱ（也）〕の例。(90) なかりけり（㊁末78中）、(91) 大納言（末78中）、(92) 山桜（末79歌）、(93) 旅衣（タビゴロモ）（末79歌）、(94) 呉竹（クレタケ）の（末77歌）、(95)

名残（ナゴリ）をば（末77歌）

(ii) 〔ㇾ〕ッ（秦語）〕―〔スヘ（京松）〕―〔スヱ（也）〕―〔ㄥ（吟尾）〕―〔ㄟ（豊）〕の例。(96) 掛け（末74拾）、(97) 経正（ツネマサ）（末75拾）

(ヲ) ㇾ〕ッ―次の如く、概ね二淘居（ふたつゆりすゑ）〔波ㇾ〕・尾ㄟ〕に対応する。

〔ㇾ〕ッ（秦語）〕―〔ㇾ〕（京松）〕―〔ㄟ（吟）〕―〔ㄟ（尾豊）〕―〔二ㄟ（也）〕の例。(98) 御坪（オツボ）（末75拾）、(99) 卿（キヤウ）の（末78中）、(100) 候ふ（末76折）、(101) 追っつき（末80拾）、ばかりなり（末72折）

(ワ) ㇾイ―概ね沈（しづみ）〔シ〕に対応する例が多い。

(i) 〔ㇾイ（秦語）〕―〔ㇾ（京松吟豊）〕―〔シ（尾）〕―〔×（也）〕の例。(102) 後の（㊁77歌）、(103) 筧（カケヒ）（末77歌）

(ii) 右記(i)に準ずるが、は**也**〔一〕、**吟豊**は〔×〕。(104) 夜（ヨ）な〳〵（㊂79歌）

(カ) ㇾ下―概ね諸本の〔ㇾ〕や〔下〕に対応する。

(i) 〔ㇾ下（秦語）〕―〔ㇾ（京松吟也尾）〕―〔下（豊）〕。(105) 太刀（タチ）（末74拾）、(106) 脇（末74拾）、(107) 花（末79歌）

(ii) 右記(i)に準ずるが**豊**も〔ㇾ〕。(108) 運命（㊀72折）

(ヨ) ㇾウ―浮（うき）（尾ウ）に対応する事が多いが、張（はり）〔尾ㇾ〕などに対応する例もある。

(i) 〔ㇾウ（秦語也）〕―〔ㇾ（京松吟）〕―〔ウ（尾）〕―〔×（豊）〕の例。(109) 運命（㊁72折）、(110) 幼少（エウセウ）（㊁78中）、(111) 我が（末76折）

(ii) 右記(i)に準ずるが、**也**は〔ㇾ〕。(112) 至る（㊀77中）

(iii) 〔ノウ（秦語）〕―〔／（京松）〕―〔ノハ（尾）〕―〔×（吟也豊）〕。(113) まかり（㊁77中）

(タ) 王・ノハ―それぞれ右記〔ノウ〕に準ずる事が多いが、〔上〕に対応する例もある。

(i) 〔王（秦語）〕―〔・ノ（京松）〕―〔／（吟也）〕―〔ノハ（尾）〕―〔ハル（豊）〕の例。(114) 飽かず（㊁77歌）、(115) 数輩（スハイ）（末77中）

(ii) 右記(i)に準ずるが、**京松**は〔／〕、**豊**は〔ウ〕。(116) 高く（㊁75拾）

(iii) 〔ノハ（秦語）〕―〔／（京松吟豊）〕―〔上（尾也）〕の例。(117) 御琵琶（オン）（㊁75口）、(118) 御室（オムロ）の（末71口）

(レ) ノスクヒ―概ね救（すくひ）に対応する事が多い。

〔スクヒ（秦語）〕―〔ノスク（京松）〕―〔ノ（吟）〕―〔ノ（尾豊）〕―〔スクヒ（也）〕の例。(119) 名残（㊀78中）

(ソ) ノ―次の如く、概ね一声（いちのこゑ）に対応する。

〔ノ（秦語）〕―〔一ノコヘ（京松）〕―〔ノ〜（也）〕―〔引一（尾）〕―〔〰（吟）〕―〔〰ノ（豊）〕の例。(120) 帯（ハ）き（㊀74拾）、(121) 出でられける（末77中）

(ツ) ニノ―次の如く、概ね二声（にのこゑ）に対応する。

〔ニノ（秦語）〕―〔二ノコヘ（京松）〕―〔二ノ〜（也）〕―〔引つ（尾）〕―〔〰ニノ（豊）〕―〔〰（吟）〕の例。(122) 申しし（末78中）

(ネ) 〰―次の如く、概ね三淘（みつゆり）〔**波**〰・**尾**ヨ〕に対応する。

〔〰（秦語）〕―〔〰（京松）〕―〔ニ（吟）〕―〔ヨ（尾豊）〕―〔ミユリ（也）〕の例。(123) 筧（カケヒ）（㊀77歌）、(124) 後（ノチ）の（㊀77歌）、(125) 後（オク）れ（㊀79歌）、(126) なかりけり（㊀四78中）、(127) 夜な〳〵（㊀79歌）、(128) 大納言（㊃78中）

(ナ) 〆—入（いる）〔波〆・尾〈・〈カ〉〕の類に対応する事が多いが、張（はり）などに対応する場合もある。

(i) 〔〆（秦語京松也）〕—〔／（吟）〕—〔〈カ（尾）〕—〔ハル（豊）〕の例。(129) 候へば（㊁76折）

(ii) 右記(i)に準ずるが、**也**は〔シヨリ／〕。(130) 叩（タタ）かせ（㊁72下ケ）、(131) 取り（**末**75下ケ）

(iii) 右記(i)に準ずるが、**也**は〔／〕・**豊**は〔上〕。(132) 候ひ（㊁72折）、(133) 候へども（㊁76折）、(134) おく（**末**72折）

(iv) 〔〆（秦語）〕—〔／（京松吟也）〕—〔〈ハ（尾）〕—〔ハル（豊）〕の例。(135) 水（ミヅ）（㊀77歌）、(136) 君（キミ）（㊀77歌）、形見（カタミ）（㊀77歌）

(v) 右記(iv)に準ずるが**豊**は〔×〕。(137) 袖（ソデ）（㊀79歌）、(138) 先（サキ）だち（㊀79歌）

(vi) 右記(iv)に準ずるが**京松**は〔・／〕。(139) 若木（ワカギ）（㊀79歌）

(ラ) 〉引—概ね引（ひき）の類に対応する。

(i) 〔〉引（秦語京松也）〕—〔〰（吟）〕—〔引（尾）〕—〔引捨（豊）〕の例。(140) 運命（**末**72折）、(141) 替（カハ）れども（**末**77歌）

(ii) 右記(i)に準ずるが**豊**は〔×〕。(142) 片しきて（**末**79歌）

(ム) ／＼コト—**京松**や**尾吟**等の〔コ×〕に対応する例がめだつが、そのほか〔／×〕や〔上×〕等に対応する例もある。なお口説以外に現われる例の対応関係はかなり複雑である。

(i) **秦語**の〔／＼コト〕が**松京尾**の〔コ×〕に対応する例。(143) 家（イヘ）（114口）、(144) 有り（8上45口）

(ii) 右記(i)に準ずるが、前田流本は詞章が異なる。(145) 絞（シボ）り（㊀㊁81口）、(146) 雖（イヘド）も（㊀㊁115口）

(iii) 右記(i)に準ずるが、**吟**も〔／＼コ〕。(147) 射ざり（㊀㊁90口）、(148) 持たせ（㊀㊁81口）

(ウ) ／＼ヲ—概ね他譜本の〔＼／〕またはそれに準ずる形に対応する。

(i) **秦語**の〔／＼ヲ〕が、**京松**の〔＼一〕、**尾**の〔シ×〕に対応する例。(149) 紫地（ムラサキヂ）（㊀㊁74拾）、(150) 脱（ヌ）いで（㊀㊁74拾）

(ii) 右記(i)に準ずるが、**尾**は〔シコ〕。(151) 三万（㊀㊁9上23拾）

(iii) **秦語**の〔／＼ヲ〕が、**京松**の〔×／〕、**尾**の〔×上〕に対応する例。(152) 甲（カフ）（74拾）、幼少（㊀㊁71口）、(153) 磨墨（スルスミ）（㊀㊁9上21口）

(iv) **秦語**の〔／＼ヲ〕が、**京松尾**等の〔×コ〕に対応する例。(154) 召し（71口）、(155) 馳（ハ）せ（71口）、黒かり（㊀㊁9上21口）

(ヰ) ／＼—原則的には諸譜本の用法に準ずる（はずである）が、実際問題としては左記の如き例もかなり認められる。

(i) **秦語**の〔／〕や〔＼〕の用法が諸譜本のそれに一致または類似する例。(156) 君（キミ）＝／／（72折）、(157) 年（トシ）＝／／（72指）、(158) 持たせ＝／＼／（76折）、(159) 遊ばいて＝／／／＼／（77下ケ）、(160) さて＝＼／（77中）、(161) 住み＝＼／（77歌）、(162) さしおき＝＼／／＼（75下ケ）

(ii) 同右**京松**のそれと一致または類似し、**前**諸本と異なる例。(163) 参れ＝＼／＼（74下ケ）、(164) 既に＝＼／／（72折）、(165) 出でさせ＝／／／＼（72折）

(iii) **秦語**の〔／／〕が諸譜本の〔／×〕や〔／＼〕またはそれに準ずる形に対応する例。(166) 控（ヒカ）へ（㊀㊁79拾）、(167) あはや（㊀㊁79拾）、(168) 御所（ゴショ）へ（㊀㊁72指）、(169) 鞭を（㊀㊁79拾）、(170) 皇后（クワウゴウ）（㊀㊁71口）、(171) 童形（㊀㊁71口）、(172) 馬より（㊀㊁71口）、(173) 十三（ジフサン）（㊀㊁72指）、(174) いささか（㊀㊁72指）、(175) いたはる（㊀㊂72

指）、(176) 運命（㊁㊂76口）、(177) 候ひて（㊂㊃72指）、(178) 参り初め（㊁㊂72指）

(iv) **秦語**の〔／＼〕が諸譜本の〔／／〕またはそれに準ずる形に対応する例。(179) 袋（㊀㊁75口）、(180) 経正（㊀㊁75口）、(181) 滋藤（㊀㊁74拾）、(182) その勢（㊀㊁79拾）

(v) **秦語**の〔／＼／〕が他譜本の〔／／／〕またはそれに準ずる形に対応する例。(183) 薩摩守（㊀㊁㊂61口）、(184) ひた甲（㊀㊁㊂61口）、(185) 来れり（㊀㊁㊂61口）、(186) 候らはれ（㊀㊁㊂71口）、(187) 候らはば（㊀㊁㊂76口）

(ノ) **語**の譜記が**秦**のそれを簡略化したと見られる例。

(i) 〔ハ（秦）〕―〔／（語）〕の例。(188) その（㊀㊁74下ケ）、(189) 宇佐（㊀81口）、(190) 行き（㊀79歌）、(191) 半天（㊀122下落）、(192) 持たせ（㊁79拾）、(193) 参らせ（㊁71口）、(194) 総劇（㊁71口）、(195) 指し（**末**79拾）、(196) 申され（**末**76口）、(197) 御室の（**末**71口）

(ii) 〔ウ（秦）〕―〔／（語）〕の例。(198) 大納言（㊀78中）、(199) 一首（**末**76下ケ）

(iii) 〔ケ（秦）〕―〔／（語）〕の例。(200) 指し（㊀79拾）、(201) 御室（**末**71口）

(iv) 〔ア（秦）〕―〔）（語）〕の例。(202) 召され（**末**75拾）

(v) 〔＼イ（秦）〕―〔＼（語）〕の例。(203) 立ち（㊀73指）、(204) 経正（㊂77下ケ）、(205) これ（**末**120初）、(206) 硯（**末**77下ケ）、(207) 経正の（**末**79下ケ）

(vi) 〔＼下（秦）〕―〔＼（語）〕の例。(208) 御室（㊀75拾）、(209) 花（**末**79歌）、(210) 早（**末**72折）、(211) 参らせ（**末**76折）

(vii) 〔シツメ（秦）〕—〔／（語）〕の例。(212) 大菩薩（ダイボサツ）（㊁100指）、(213) 入れさせ（㊁100指）

(viii) 〔〻（秦）〕—〔〜（語）〕の例。(214) 宮（ミヤ）（㊀77歌）、(215) 預かつて（㊂75折）

(ix) 〔＼（秦）〕—〔×（語）〕の例。(216) 御室（㊁71口）

(x) 〔／コト（秦）〕—〔××（語）〕の例。(217) 給ひ（㊀㊁86口）、(218) 帯（タイ）し（㊀㊁115口）

(オ) **秦**の譜記が誤記かと見られる例。

(219) ただ＝／／（秦74下ケ）—＼＼（語）、(220) 候らはば＝＼／／＼×（秦76口）—／＼／＼×（語）、(221) 中（ウチ）＝

ヌア（秦77歌）—ハア（語）

説　明

＊右記(A)の詞章対照例において、(1)(2)(12)の例はそれぞれ次の如き意味を表わす。

(1)—**秦**巻7下72頁「つかまつる」の部分は**語**も同様だが、**京松尾吟也豊**や㊐㊦㋩諸本では「つかまつり候ひし」となっている。

(2)—**秦**7下73頁「候ひぬ」の部分は**語**も同様だが、**京**〜㋩諸本では「候へば」とある。

(12)—**秦**7下41頁「主に」の部分は**語**も同様だが、**京**〜㋩の諸本では「上洛の時主に」とある。

＊つまり→印は波線部分のみに関する異同を示す。

また×は、その部分の詞章（他本に存する詞章）が欠けている事を示す。

＊ここでは**秦**の巻7下の例のみを掲げる故、各用例については一々「7下」と記さず頁数のみを示した。

＊各本の略称は次の如くである。

秦—秦音曲鈔、語—平家語本、京—京都大学蔵波多野流譜本、松—松岡仲良写波多野流譜本（東京大学蔵）、尾—

尾崎正忠氏蔵平家正節、也―横井也有写平語（横井緑時氏蔵）、豊―伝豊川検校本（早稲田大学演博蔵）、吟―平曲吟譜（故岩淵悦太郎氏蔵）、カ―覚一本（岩波大系本）、ヨ―葉子十行本（朝日古典全書本）、ト―下村時房刊本（古典全集本）、ル―流布本（元和七年版本）

各本の性格等については『平曲譜本の研究』第一編なども参照の事。

＊(B)譜記対照例の示し方も概ね右記(A)の場合に準ずるが、さし当り(イ)の(1)の例は次の如き意味を表わす。

秦7下77頁中音の「至る」に関し、その第二拍部分の譜記を見ると、**秦語**は〔ろ〕、**京松也**は〔ろ〕、**吟**は〔ろ〕、**尾豊**は〔ろ〕の如き対応を示す。

＊ここでも用例は概ね**秦**の巻7下からとった故、その場合は頁数と曲節名のみを示した。（144）の例の如く他の巻をとり上げた場合は、すべて（8上45ロ）の如く示した。

＊譜本の略称も、前記詞章比較の場合にほぼ準ずるが、そのほか次の如き略称を用いた例もある。

波―**京松**などいわゆる波多野流本の総称。**前**―いわゆる前田流本の総称、具体的には**尾也豊吟**など。

＊比較に当っては、管見の範囲内で大ていの譜本をとり上げたが、ここでは前田流本の一部を省略した場合（例えば（143）以下の諸例など）もある。それらを一々とり上げても、煩雑化するばかりで余り積極的な意味がないからである。ただし**京松**（波多野流本の代表）及び**尾**（前田流本の代表）の三者は常にとり上げた。

＊節ハカセは原則として〔　〕印でかこんだ。〔×〕は譜記がない事を示す。

＊曲節名に関しては次の如き略称を用いた。ロ―口説、指―指声、折―折声、初―初重、中―中音、三―三重

＊譜記比較例に関し、(A)の場合の(イ)～(ニ)の如き分類をする事は容易でないが、最後の(ノ)(オ)の諸例は、いずれも**秦**と**語**の譜記差に関するものである。

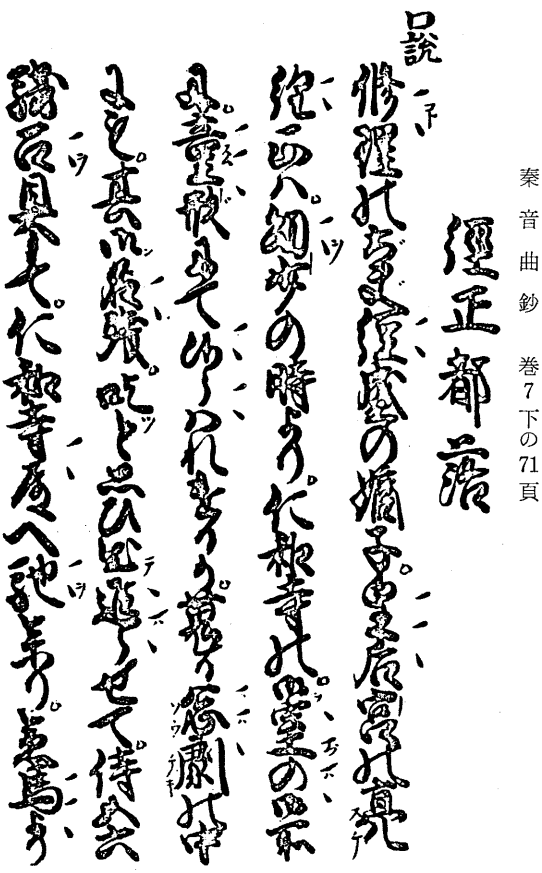
その他に関しては、(イ)(ロ)など最初に掲げたものは**秦語**両書のみの特異性と見るべき場合が多く、(ネ)(ナ)など後に掲

げたものは他譜本の譜記と一致または類似する場合が多い。また(ム)〜(キ)の諸例は、他譜本とよく似た節ハカセの用法に関するものである。ただしそのような意味での(イ)〜(キ)の区別は、必ずしもはっきりしない場合がある。

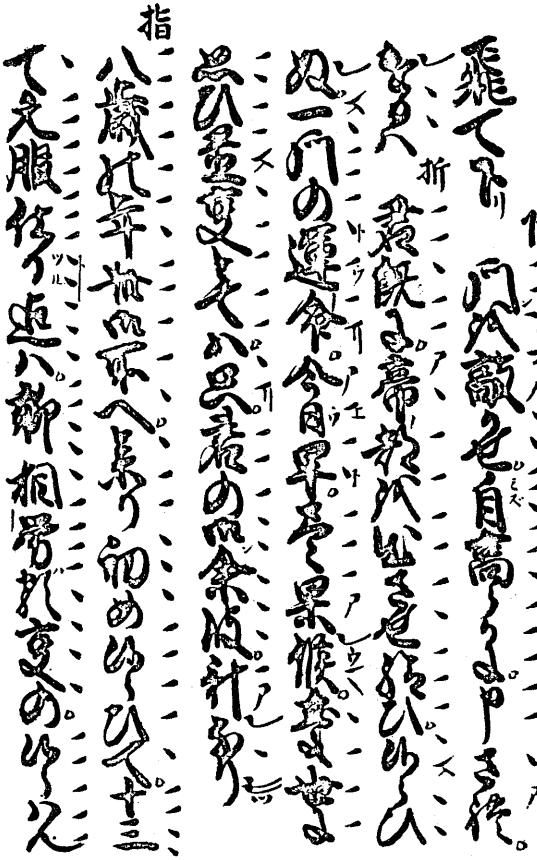
＊そのほか詞章や譜記の比較対照例及びその示し方については、『平曲譜本の研究』176頁〜を参照の事。

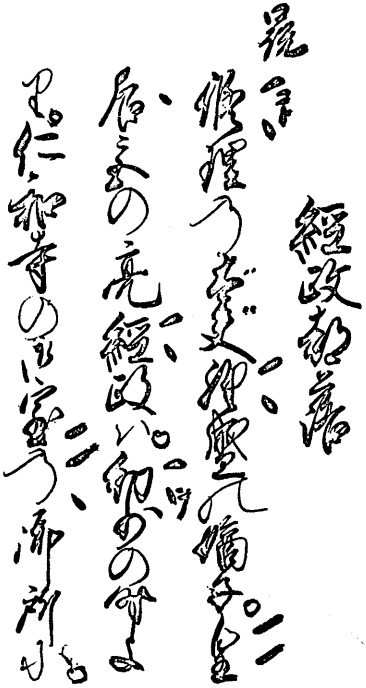
〔6.2〕参考——秦音曲鈔・平家語本・松岡仲良写波多野流本の一部影印

秦音曲鈔　巻7下の71頁

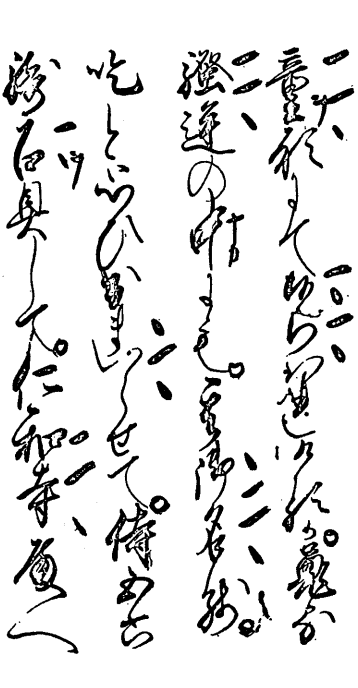


同　72頁



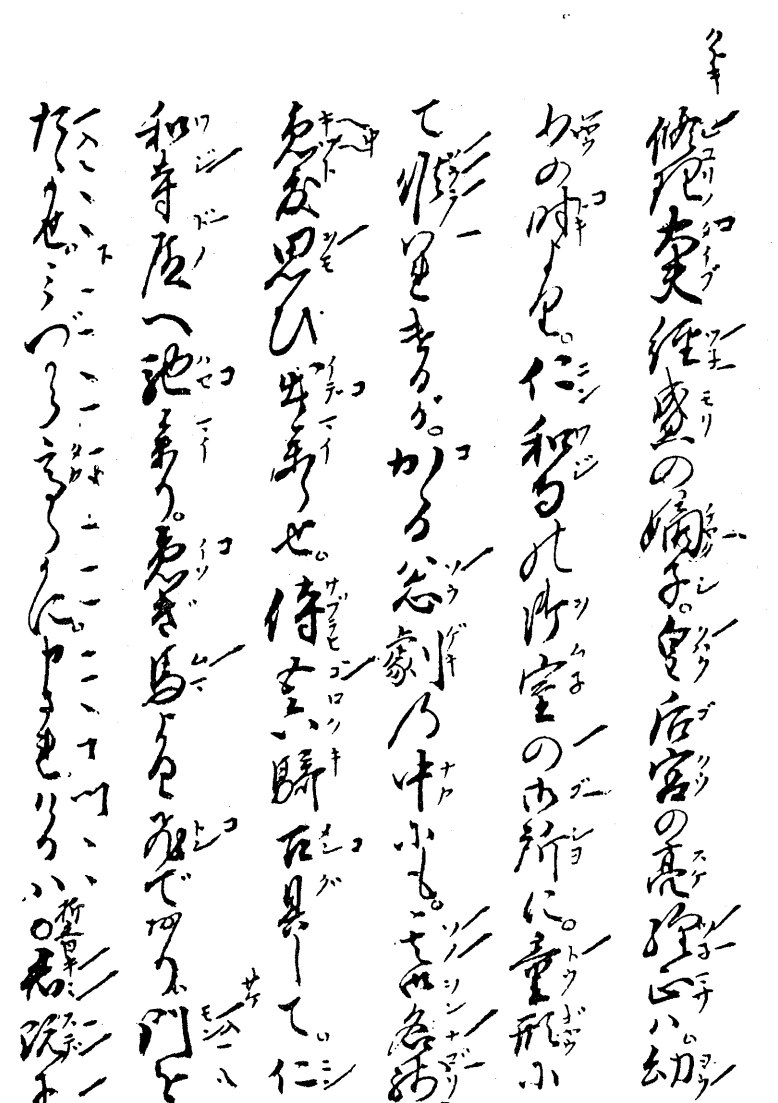
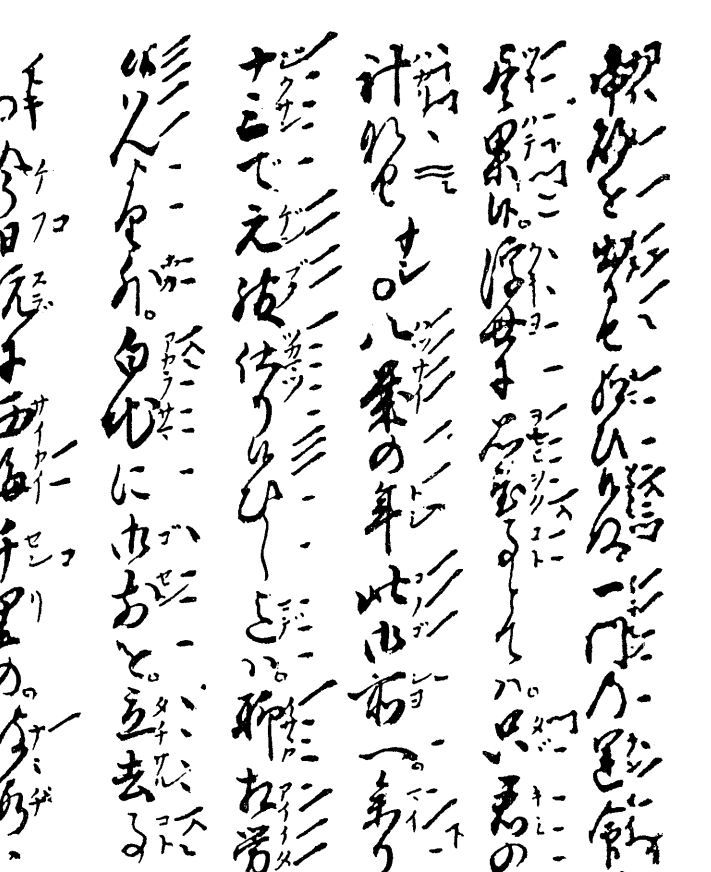


平家語本　　巻14の３頁



同　　４頁

松岡仲良写波多野流譜本　巻7下の第二冊1頁



同　2頁